

クラブライフの提案

紀州鉄道の会員制リゾートクラブ「つどう」

目次

長期滞在して大樹齢杉と対話

1:【塩原温泉に7泊滞在の提案】【樹齢1500年の杉と対話】

かつては有数の宴会団体客の集客地であった塩原温泉になぜ7泊もするかといえば、たとえば樹齢1500年の杉と7日間毎朝対話する目的があるからだと……。

宇都宮侯も13日間滞在

2:【宇都宮の殿様の塩原13日滞在】【食事の工夫で悩む料理長】

天保年間、飢饉の折、塩原温泉に活を入れるべく宇都宮藩の戸田の殿さまが13日滞在した。ただこれを真似て滞在するには食事が問題。

ニューヨークのHunter Mt.と塩原のハンタマ

3:【ニューヨークのHunter Mt.と塩原のハンタマ】【このホテルからはハンタマには毎日送迎】

20年前にブームだったスキーを余裕をもってやってみよう。近くに興味深いスキー場がある。

奥州街道からのアクセス

4:【奥州街道からのアクセス】【会津西街道から塩原に 人のゆく裏に……】

塩原温泉にあえてクルマや新幹線に乗らずに裏から行くと、開通に苦節80年を要した鉄道があった。

不毛な扇状地と開発

5:【水なく住人まばらで耕作不適な大扇状地】【欧州をベンチマークに貴臣賢人による大開発】

かつては貧しかった那須が、豊かだった塩原温泉を抜いた発想の原点は「国際化」。

貴人別荘と宴会団体客

6:【交通網充実、貴人の別荘・文人墨客の往来、進む都市化】【塩原温泉に団体宴会客が頻繁に到来】

大正から90年バブルまでの80年間、塩原温泉は宴会目的の団体客に恵まれた。

高速道・新幹線と新滞在客

7:【高速道路に新幹線 那須に開発が進み観光地化】【後退する団体宴会客 滞在客に期待】

商品のライフサイクルでいうと宴会団体客は後退期。滞在客にはかえってふさわしい状況が生まれた……。

那須塩原ホテル設計者との会話

8:【あのときこのホテルを】

クラブライフの誘い①

【塩原温泉に7泊滞在の提案】

那須高原に比べると「地味」な温泉場にしか映らない。紀州鉄道があえてここに80億円かけて「那須塩原ホテル」を建設したのは1990年のことである。いまは、会員制リゾート「倶楽部つどう」(To do)の一施設でもあり、7-8階はおもに会員本人(名義人)のフロアとして運用している。「倶楽部つどう」の会員になって、たとえばここで7泊滞在する。あえて7泊としたのは、しばしばバケーションオーナーシップとよばれる英米流の会員制リゾートクラブに準じたからで、その半分の期間に分割することもよくおこなわれるから。7泊でなければならない理由はない。ただ、主目的は観光(tour)ではなく滞在(stay)。ここは少々こだわるところである。観光するだけならば、旅行代理店のツアー商品の方が優れているともいえ、自分の宿として滞在できるからこそそのリゾートクラブであろう。紀州鉄道はもともと滞在型の保養を指向するのに適したリゾートクラブである。

リゾートの語源に従えば、たとえば塩原に行くのは、塩原にたびたび帰ることの一環として、塩原を訪れることを意味する。そして滞在とは、部屋のなかに閉じこもって1週間文筆活用に励むこともあってよいが、しかし閉じこもったままの状態のみを意味しない。滞在先からあちらこちら出かけることは含まれる。クルマか公共交通機関か徒歩かで行動範囲は異なってくる。事前の計画が重要になるが、いずれにしても、できたら普段とちがったことを含めて、自分で計画しなければならない。リゾートが山海の僻地にあるのは、ただそこに居るだけでも水や空気がふだんとちがって綺麗とか美味しいとか、そこからちかくの山・海に頻りに行けることを確実にするためである。

【樹齢1500年の杉と対話】

紀州鉄道の「那須塩原ホテル」に滞在する場合、なにがあるのだろうか。ゴルフにスキーに温泉めぐり(塩原の街なかには泉質の異なる温泉がいくつか並んでいる)に会席料理と散策とならべることで十分なようにも見えるが、なにか心身の健康につながる精神的なものが欲しい。ここから先は主観で大いに異なるところだが、このホテルの裏山の塩原八幡宮の境内に樹齢1500年くらいの杉の木が2本並んで生えている。上り坂だがほんの数分であるから、雨が降ったとしてもたびたび訪れることはできる。

よほど水に恵まれて杉の生育環境によいのだろう。屋久島の6000年を目指してまだ生き延びるようだ。このくらいの樹木になると、小説にもなるし、国の天然記念物(1927年指定)にもなるが、塩原八幡宮のしつけが良いのか、この2本の杉の佇まいに嫌みがない。小説や記念物指定にお構いなく平然と佇んでいる。その平然さに敬意を表す。

そこで、7日間滞在して、天候にかかわらず訪れ、毎日定時に30分無言で語り掛けたら、なにか答えが出てきそうな予感がする。霊験があったら、ホテルの支配人に宮司を紹介してもらって氏子になるのも一興である。ただし塩原八幡宮の社格は那須町にある県社乃木神社よりも下の「村社」である。しかしこのごく平凡な社格が超然とした古杉のためには似合う。かえって良かったのだと思う。



逆杉樹齡 1500 年 部分 塩原八幡宮

クラブライフの誘い②

【宇都宮の殿様の塩原 13 日間滞在】

[塩原郷土史研究会\(加藤明徹・塩原甘露山妙雲寺住職\)の研究](#)に拠れば、宇都宮城主戸田忠温守が 1835 年(天保 6 年)10 月 1 日から 13 日まで塩原に滞在し、その 13 日間は、初日入湯、2 日神社参拝入浴散策、3 日隣村入浴宿泊、4 日妙雲寺参拝、5 日狩猟、6 日静養、7 日静養、8 日朝湯、9 日隣村茸狩、10 日休養、11 日狩猟、12 日休養帰途準備、13 日帰途というもので、13 日間のうち到着日と出発日を除く 11 日間で終日外出しなかった日は 5 日間と推定できる。天保飢饉のさなかの不況の折で景気づけの公共事業という意味もあった塩原温泉入浴であるとしたら、うがち過ぎであろうか。温泉関係者の準備作業やお供の人数、温泉側への支払いについて、史料にもとづき描かれており興味深く、また塩原の歴史に関する広範な研究なので、ご関心の向きは以下の URL をご参照いただきたい。

時代下って、大正から昭和の初期の文人墨客なら、静養が執筆活動(これは考える作業と書く作業の混在)に代わる。売れっ子の書き手となると、出版社者が滞在費を負担して、書き手を拘束し期日を設定して圧力をかける。塩原を訪れた文人は執筆目的のみならず取材目的もあったろうから、すべてとはいわないが、不思議なもので場所を変えると急に筆が進んだりする。いまの時代、カフェでそれらしき作業をする姿を見かけると、とくに本人にとってはそれどころではないであろう姿が、他人の私にはほほえましく見える。

東京・駿河台に「山の上ホテル」があり、当時はヨーロッパ好みの本館しかなかったのだが、比較的天井の高い部屋に、大きめの机と実用的なスタンドと少々座り心地の良い椅子をあてがってもらう。それだけで滞在が可能になる。このホテルはそれがウリで実績もあったから、そのように指示すれば、ハウスキーパーは心得たもので行き届いたセットを準備していたものだ。

【食事の工夫で悩む料理長】

難しいのは食事である。「山の上ホテル」は特徴のある仏料理(他にてんぷらコーナー)が売りで、価格もそれなりであったが、いかに出版社もちであっても、毎食となると食欲は減退する。ホテルの周囲は明治大学の校

舍しかないから、少々坂を下って、駿河台下の裏道あたりに各自好みの店を探るか、あるいは、心得た編集者が連れて行ってくれたりするようだ。

自宅の食事はさして変化もないのに文句を言わずに食べるが、たとえ好意的な前提があつて、他人が作る食事となるとなかなかもって続きにくく、何か言いたくなる。これは不思議なものである。欧米のタイムシェアの基本がコンドミニアムホテルで、キッチンがついているのはその故であろう。自分で作ったものには文句を言わないからだ。わがままと自己規制をさまよう。期日までに書きあげる目標が自己規制を高める。職業病というかブルジョア意識というか、リゾートと仕事は妙なところで繋がっている。いまの時代はWEBとPCがあるために、遠隔地で処理できる仕事の種類や幅が拡大した。ただしこれは良し悪しで、滞在者の目的や考え次第でWEBやPCの意義がおおきく変わるであろう。倶楽部つどうの会員(名義人)が7日滞在となれば、食事や机やインターネットの接続はある程度わがままが効くかもしれず、ここが会員制ならではの醍醐味である。



宇都宮城 塩原温泉まで 60Km



塩原 甘露山妙雲寺

【本稿の参考資料】

「那須塩原市の歴史」那須塩原市

<http://www.city.nasushiobara.lg.jp/188/190/000913.html>

「塩原の歴史」塩原郷土史研究会(加藤明徹 塩原甘露山妙雲寺住職)

江戸時代を含め、それ以前の塩原の歴史について詳細な考察と記述がある。ここで紹介したのは、以下のURLの「九宇都宮城主塩原入湯長期滞在」の部分に拠る。

<http://www.geocities.jp/momiji0286/edo19-1.html>

クラブライフの誘い③

【ニューヨークの Hunter Mt.と塩原のハンタマ】

紀州鉄道「那須塩原ホテル」から、日塩もみじ街道をおよそ 10 キロ登ったところに、[ハンターマウンテンボウル塩原](#)（以下ハンタマと略称する）というスキーエリアがある。25 周年というから 1987 年 のオープンである。日本経済絶好調でリゾート開発に沸いていた時期であるから、スキー場開発プロジェクトは珍しくもなかったのであるが、実は、このスキー 場は一味違って、アメリカのスキー場経営のノウハウを取り込んでいる。ここで詳細には触れないが、スノーエリアの開発は日本に比べるとアメリカの方がはるかに上手である。日本は丸の内大手町の伝統的大法人が資金を大量に用意し、開発現場にどんとつぎ込む短期決戦型なので、格好がよいのだが後が続かない。

当時のアメリカは融資(debt)で 15%以上、出資(equity)で 20%以上の資金コストがかかる時代だった。デベロッパは資金あつめに必死で、香港マネーでもさむらいボンドでも何でもいから資金の出し手を教えろと懇願された。資金を集めたら建物に変え、1 階は店舗、2 階以上はホテルコンドミニアムで分譲し資金を回収すると同時に、分譲した商品が収益をあげるように投資商品として仕組んでおき稼働を旨に運用し、時間をかけて拡張していく計画をもっていた。

クリスマス前に滑走可能にすれば都市型(日帰り)スキー場として競争上優位に立てる。東海岸のスキーエリアはいわば SMS(人工降雪システム)の本場で、エリア独特の風向風量を計算しながら、ノズルの形状や圧縮空気の設定を決定する。北に行くほど安定はするが、市場から遠くなるので滞在型にせざるを得ない。夏季も考慮しながらゴルフコース・ハウジング・商業ゾーンを組み合わせた計画を建てる。ちなみにバーモント州の [Stratton Mountain Ski Resort](#) はその一例でニューヨーク市内から 221 マイル 4-5 時間である。

【紀鉄・那須塩原ホテルからはハンタマには毎日送迎】

一方、[Hunter Mountain](#) はニューヨーク市街から 120 マイルで 2.5 時間である。ここにも滞在施設はあるが、Stratton に比べるとカジュアルな構成になっているはずである。はずというのは、筆者が SMS の調査で東海岸を若干調査したのは、まさにハンタマ塩原が開場した翌年のあたりであった。

その Hunter Mountain のノウハウを、丸紅ニューヨークに勤務する商社マンが目し、日本に導入したもの記憶している。たぶん Hunter Mountain が好きで通い詰めたか、あるいはそういう方が近くに居られたと想像する。冬のニューヨークは結構寒いですが、それでもスキー場運営に必要な降雪は北に行くほど安定する。南に降りるほど市場(ニューヨーク・ニューアーク・ボストンなど)には近づくが降雪は不安定になるので、SMS が必要になる。

ニューヨークの Hunter Mountain の社長が、「Hunter Mountain の来場者が日に 1 万人超すのにいろんな努力をしたが、塩原は初年度から 1 万人を超した」「日本はすごい、他にスキー場があったら紹介してほしい」といわれたことを思い出す。まさに隔日の感があるが、あらためて東京・日本橋からハンタマまでの距離を測ると 120 マイル強。2.5 時間では着けないかもしれないが、丸紅もよくぞ探したものである。

スキー場内の輸送は鉄道営業法による。その統計では日本の索道輸送人口は最盛期の半分程度。しかし連休のためかたまたま訪れたこの日のハンタマは活況だった。「那須塩原ホテル」からハンタマ通いをするのもリゾ

ートライフのコアになろう。そういう客はすでにいると見えて、このホテルからは毎日送迎しているという。



ハンターマウンテンボウル塩原 スキー場

ハンタマは紀鉄那須塩原ホテルから 10 キロ程度。シーズン中は毎朝送迎がある。



たまたまこの日のハンタマには若者だけではなく、ファミリー層も中年層も目立った。原田知世の『私をスキーに連れてって』(1987 年)に比べると、まだしも落ちついていて、むしろいい雰囲気である。

クラブライフの誘い④

【奥州街道からのアクセス】

クルマでのアクセスはいまさら記すべきこともない。東京・日本橋から 185 キロ、東北自動車道を北上、西那須野塩原 IC から 400 号線(塩原バレーライン線)を進む。しかし、運転して疲れたは意味がないという発想を優先させ、ここはクルマを運転しないルートをおさらいする。

那須の玄関はもともと「黒磯駅」だったはずだが、東北新幹線が開通(1982 年)して、在来線の旧東那須野駅が「那須塩原駅」と改称されて以来面影が薄い。いまの那須塩原市ももとはといえばその黒磯市が母体である。1889 年の町村制施行により黒磯村はじめ 30 近い村や他の開墾社のごとき構成単位が合併し那須郡東那須野

村が成立する。そこから1912年にその一部が分立し黒磯町、それが1970年に黒磯市となる。海岸近くでもないのに「黒磯」と書するのは、「1185年黒館五郎、磯勝光らが黒磯を開いたと伝えられる」ゆえと聞く。御用邸やホテル・旅館宿泊施設、別荘などが集積するのは、黒磯でもおおむね湯本と称する地区である。

新幹線開通の82年に塩原町が塩谷郡から那須郡へ編入される。塩原より広義な塩谷という地名もある。塩原町は2005年に西那須野町とともに黒磯市に合併され那須塩原市に包括される。このほかにもまだ自治体がある。新幹線の東側で乃木希典の旧別荘や乃木神社(旧社格は県社)がある那須町、さらに南に下って、那須烏山市(那須郡南那須町と同郡烏山町の合併)というのもある。はやいはなし、なぜ那須市と塩原市で発展してこなかったのか。ややこしい地元事情があったのかもしれない。また、東北自動車道は下りで東京から西那須野塩原(1974年開設)→黒磯板室→那須→那須高原SA→白河と続く。

「那須」は大もて。一方の塩原はなんとなく那須の一部、その影はやや薄い。塩原は新幹線駅からざっと25-28キロ、那須の一部といっても、路線バスで65分程度の乗車で、東京駅13:20発なら塩原温泉のバスセンターに16:00頃に着く。

【会津西街道から塩原に 人のゆく裏に……】

以上は、奥州街道(仙台松前道)側からアクセスする場合である。震災のあった福島でいうと中通りに続く。しかしながら塩原には会津西街道(いまの会津三方道路)側からのアクセスがある。東京下町というか浅草に帰属感・親近感がある場合は、塩原は日光や鬼怒川・川治の北にある温泉場と理解するであろう。日光と会津若松をつなぐ道で会津藩主が参勤交代で使ったルートであるが、国道112号線のほかに野岩鉄道が走る「野岩鉄道」の歴史は明治25年(1892)に発布された鉄道敷設法に始まる」という説もある。

<http://www3.yomogi.or.jp/skta1812/syoko/kyuukan5/u.html>

会津鬼怒川線として実際に開業したのは1986年(昭和61年)10月9日で、東武鉄道鬼怒川線・日光線・伊勢崎線と直通運転を始めた。開通まで「苦節80年」、いまも営業するものの、気の毒なことこの路線の収益(売上)は年々下降する。それでも、鬼怒川温泉駅経由で塩原にアクセスできる特急が、浅草から日に約12本、JR新宿からも特急3本がある。最寄駅は「南三依塩原」、路線バスで10キロ、20分である。かりにJR新宿を13:05に乗ると路線バス使っても16:30頃、浅草なら12:00に出て15:20頃に付近のバス停に着ける。ただし、これは接続がスムーズな例で、いつもこうなるわけではない。詳細は時刻表を参照していただきたい。



冬季の露天風呂前景

クラブライフの誘い⑤

【水なく住人まばらで耕作不適な大扇状地】

東京から見ても塩原温泉は遠い。浅草・新宿・東京の駅を羽田に見立てれば、上海に行くような感じかもしれない。いまの時代、こんなに時間をかけてまでして、塩原に行く価値があるのだろうか。団体宴会市場の平均的な判断はあまり好意的ではない。那須・塩原の事情に触れよう。日本の温泉旅館が抱える一般的な問題にも通ずる部分もある。

那須の原是那珂川と箒川の間扇状地で広さは約 4 万 ha、18H のゴルフ場で 250 個分以上、日本では最大級の扇状地である。その那須野ヶ原は扇状地特有の礫層が厚く堆積し、扇状地内の河川は水無川でほとんどが地面に潜り込み伏流する。要は、この広大な土地には飲み水に事欠きひとが住み着かず稲作は到底できない。その故か塩原は宇都宮藩の支配下にあり、また、那須にはこれといった大名がなく、大田原藩領や黒羽藩領と幕府天領が混在していた。那須野が原の貧しさは軽井沢のそれを相通じるところがあり興味深い。

水さえあればという想いは、18-19 世紀中葉の江戸時代にもあって、「那須塩原市の歴史」(那須塩原市)によれば、1658 年新田開発の長島堀開削から 1842 年の米沢藩土加勢友助らの加治屋周辺開墾にいたるいくつかの事業が列挙してある。

1394 年からの応永年間に茶臼岳が大規模爆発、1659 年地震で元湯温泉に大被害、1783 年天明大飢饉が那須を襲い、1846 年茶臼岳噴火以来活動を持続、2011 年の大震災もこの一端であろうか。火山噴火の岩石に保水力のない土壌で果実はそう多くはなかった。戊辰戦争で塩原温泉に旧幕府軍が駐屯、全村消失の被害にあいながら明治維新を迎えるものの、塩原の方が豊かであったと想像できよう。

【欧州をベンチマークに重点賢人による大開発】

しかしながら明治期になると、那須野が原はがぜん開発ラッシュを迎えた。この話は 1880 年(明治 13 年)土木県令と異名をとる三島通庸(後警視總監 1888 没)らの肇耕社、印南文作・矢板武らの那須開墾社、両者による那須疏水のスピード通水(疏水本幹 16.3km を 5 ヶ月で完成)と語るのが通例のようだが、それはそれとして、戊辰戦争では官軍奥羽鎮撫総督参謀だった品川弥二郎(1900 没)という人物がいる。あまり目立たないが長州派閥トップの山形有朋(1922 年没)より 5 歳若いだけだ。3 恩人にも数えられないが塩原の本当の恩人は彼ではなかろうか。維新後の明治 3 年(1870 年)渡欧して普仏戦争を視察、ドイツ・イギリスに留学、帰国後に農商務大輔・駐独公使・宮内省御料局長・枢密顧問官・内務大臣を歴任、辞して西郷従道と国民協会を組織し多彩な仕事を手掛けるが、そのなかに産業組合(現在の農業系統組織の祖)の設立がある。ドイツ流の大規模農業を那須野が原で具現しようと考えてもおかしくはない。旧藩主の毛利家はじめ大山巖(日露戦争時満州軍総司令官・元老 1916 没)や西郷従道(海相・枢密顧問官 1902 没)、さらには島津家にも農場経営に参入させ、加えて御用邸の塩原・那須誘致を画策したのも御料局長の立場で活用してのことであろう。つまり那須野が原開発にコンセプトを確立、事後の展開を堅固なものにしたという点で特筆すべきと思われる。

1886年(明治19年)宇都宮～黒磯間の鉄道開通し、黒磯、那須(西那須野)駅が開業、新陸羽街道(国道4号)や塩原新道(塩原街道)そして鉄道からみた肋骨状の関連道路の整備が進む。その霊験あつてか2年後に松方正義が始める。維新の功臣らによる農場経営に弾みがついた。

クラブライフの薦め⑥

【交通網充実、貴人の別荘・文人墨客の往来、進む都市化】

開発ラッシュで生み出された所得の一部は塩原温泉にも撒かれた。また、鉄道が開通すると尾崎紅葉や奥蘭田の文章が媒体に乗って功を奏し、遠隔地東京からも集客可能となった。黒磯-塩原は26キロ。横川-軽井沢は碓氷峠経由で19キロ、アップダウンを考えると両者は似たようなもので、近いとは言えないのだけれども、頑張れば行ける距離である。明治の後半から大正にかけて、塩原は明るい兆しに包まれた。

ひとつは交通が便利になった。東那須野駅開業、1908年に西那須野～大田原間に那須人車軌道開通、関谷～西那須野間に塩原軌道が開通、1914年黒磯～那須間に乗合自動車が行き開始、1922年塩原軌道、電車に改め西那須野から塩原口まで開通(昭和10年廃止)した。

第二に、交通が便利になったせいか文人墨客の往来が散見されるようになった。夏目漱石は1912年に塩原に数日滞在したが、実は、夏目のまえに徳富蘇峰・長塚節・田山花袋・国木田独步・尾崎紅葉・斎藤茂吉・与謝野鉄幹・晶子が、また夏目の後に大町桂月・会津八一、室生犀星、谷崎潤一郎、野口雨情、北原白秋などが、その滞在期間を差こそあれ宿泊したことが、塩原温泉旅館の自慢の種になっている。その夏目の門下となる森田草平が1908年(明治41年)に平塚雷鳥と尾頭峠で心中未遂を起こす。21歳の文学好み令嬢が5歳上の作家志望の妻子ある彼と恋仲になり家出、塩原温泉奥の尾頭峠で心中するも未遂に終わるも、師事した夏目漱石(当時朝日新聞文芸欄担当)の勧めで心中の顛末を小説「煤煙」とし朝日新聞に連載した。この効果はいかなる著名作家の小説よりもブランドの認知度を高めたであろう。

第三に若干の都市化が見られた。1902年の大山巖・03年の松方正義の別邸建築、同じく故三島通庸の別邸を遺族が献上して塩原御用邸を造営、1912年塩原水力電気株式会社が電灯の供給、ついに塩原にも明かりがついた。そのせいか、1918年に黒磯興業(株)が銀行業務を開業した。その翌年、塩原村が町制施行により塩原町となるのである。

【塩原温泉に団体宴会客が頻繁に到来】

そして第四に大正から昭和初期にかけて、塩原の温泉街に団体宴会客が増加した。これは産業の発展・文人墨客の紹介・輸送の充実があろう。最盛期には芸妓が300名はいたという。「塩原もの語り館」にある往年の写真には「日本フェルト」の半纏を羽織った元気なリーダーが率いる宴会が映っていた。第1次大戦で輸入途絶した製紙用フェルトの生産のため、当時の主力紙業者が結集し、1917年、東京府下北豊島郡王子町に日本フェルト(株)を設立して操業開始し順調に成長した会社だ。その日本フェルトとすれば今なお健在である。この時期こそ絶好調の塩原温泉であった。

しかしながら好事魔多く、その暗示というにはいささか早すぎだが、1931年に黒磯駅前大火が起きて140戸焼

失した。1939 年に傷痍軍人塩原温泉療養所(現国立塩原温泉病院)開設。1941 年に大東亜戦争が始まり、現在は碑があるのみだが那須塩原市上厚崎、埼玉(さきたま)に 1942 年飛行場開設、熊谷陸軍飛行学校(陸軍航空本部長隷下の学校)須野分教所として開設した。1944 年には東京の国民学校児童が集団疎開してきた。こうなるととも温泉で宴会どころではない。



昭和初期の宴会団体客



荒野の那須野が原でドイツ流大規模農業を範とする開発が進み、華族農場や別荘ができ始める一方で、塩原温泉は宴会団体客が盛んに訪れた。芸者は 300 人を数えるという繁栄ぶりだった。



こうした宴会団体客は 1990 年のバブル期でピークアウトし、温泉旅館の駐車場に観光バスが軒を並べる光景

は、徐々に後退していった。そして、静けさを取り戻し始めた塩原には滞在客が似合う。

(注)以上の写真や画像はいずれも「[塩原もの語り館](#)」による。

クラブライフの薦め⑦

【高速道路に新幹線 那須に開発が進み観光地化】

戦後の温泉街や牧場が活気づくには少なからぬ時間がかかる。1950年に塩原町、日光国立公園の一部に指定され、53年に塩原町役場庁舎新築(4年後の門前大火で焼失の運命にあった)、合併が進み新・黒磯町、西那須野町、塩原町が誕生した。

戦後のこの地の特色は、ひとつに交通網の充実である。細部は省略して主だったものを並べると、1959年在来線電化(宝積寺・黒磯間)、65年塩原バレーライン舗装、68年東野鉄道廃止(もともと金丸原陸軍飛行場の軍事物資輸送)、72年日塩もみじライン開通(日光塩原間)、74年東北縦貫自動車道・矢板 白河間開通、西那須野塩原 IC 開設、76年黒磯バイパス、81年地方道の国道400号昇格、82年東北新幹線開通・那須塩原駅(旧東那須野駅)開業。86年野岩鉄道会津鬼怒川線開通・上三依塩原開業(これは市の年表にはない)、07年地域「ゆ〜バス」が運行開始した。東京・日本橋を起点にすれば那須も塩原も180km台、計算上は3時間以内である。

【後退する団体宴会客 登場する滞在客】

つぎにしばらくして起きる高度経済成長、そのあとしばらく続く安定成長である。設備投資した温泉旅館にとって最高の客は観光バスで乗り付ける宴会団体客である。日に何台の観光バスがわが旅館の駐車場に並ぶか、そのためには何をすればいいのかを競いあった。事業者の普請道楽は経営力の基盤でもあり一概に否定できないものの、多くの旅館に多額の有利子負債と過大なパブリックスペースを残した。この償却は膨大な数の団体宴会客が可能にした。

大正から昭和初期までの団体宴会客は、大東亜戦争前後の統制経済期を除き、89年12月にピークを迎えた90年バブル崩壊まで続いた。売上最高記録は94年前後に出て、その後は宴会団体客が低減しはじめ、徐々に個人客が主流になる。そして那須と塩原を比べたら、塩原のほうが宴会団体客に依存したウエイトが高かったであろう。現状はその反動にあるのかもしれないのである。

さりながら、宴会団体客の他に個人客も増える。これは、社団法人日本リゾートクラブ協会にとってはむしろ歓迎すべきことであった。きままな個人客は1泊、あるいはそれもしないで日帰りするかもしれないけれども、ひよっとすると、7泊8日、まるまる1週間、滞在していただける、あるいは1週間は無理でも2泊でも3泊でもして滞在を味わうかもしれない。宴会団体客の長滞在は、コンベンションのような催事でもない限り、集団力学的にも不可能だが、個人客には、コンベンションがあろうがなかろうが、その可能性がある。リゾートは観光(観光対象を回って動く turn)をも歓迎するが、その本意は滞在(stay)を楽しんでいただくことにある。リゾートクラブの施設や運用には、何らかの程度に、その滞在機能を充足する仕掛けがある。それゆえに設置施設費用の一部負担や利用料の先払い的な意味を持つ入会金や維持費があり会員制につながるのである。



逆杉 頂部 塩原八幡宮

⑧あのとこのホテルを

Q:このホテルの計画はいつ頃でしたか・

高崎:1989(平成1年)に計画着手し平成3年に竣工開業いたしました。紀州鉄道の会員制施設は主に関東以南に展開していましたが、大半を占める首都圏の会員から北関東にも本格施設をとの要望を受け、たまたま縁のあった当地に建設を決定しました。

Q:裏の階段をあがると、逆杉まで500メートルくらい。塩原八幡宮のご縁でしょうか。

高崎:塩原八幡宮は八幡太郎義家が逆杉に靈感を受け建立したとも伝えられますが、ホテル敷地に隣接し能の鶴でも知られる源三位頼政の孫が隠れ住んだ鍾乳洞もあって、川の流れと巖に人を呼ぶ気のようなものを感じ、会員制ホテルに合致していると直観しました。

Q:リゾート施設は商業用地や住宅開発と違って、海そば・河そば・崖っ縁を好みますが、規制が多くなかなか厄介なのです。

高崎:ここも南に箒川支流と崖を背負う、細長く奥行のない土地なので、普通に考えると旅館には適しません。しかし、建てるとなればこの土地の長所を最大限に活かす必要があります。

Q:塩原エコーラインの先に箒川本流、崖の下の小さな川は箒川の支流。塩原エコーラインと崖にはさまれた用地ですね。

高崎:道路にそった細長い土地ですが、崖は凝灰岩系の柔らかい岩が露出した独特の趣きと、さまざま樹木が枝を広げています。崖を借景とし川を取り込む、これがこの敷地を活かす手法と判断しました。

Q:和と洋がよく調和していると感じましたが…。

高崎:当社のホテルの外観は洋風のものが多いのですが、当時の風潮を受けて、和をベースに洋の合理性を加えました。敷地が広ければ宿泊部門は離れ形式にしますが、一般的な方法ながら、3層部分までを共用・付帯設備、4層以上を宿泊部門、駐車場は地下に配置しました。

Q:建物の表側と裏側では表情が全く違いますね。

高崎:敷地の形状から、道路側と崖や川の庭園側を建物で分断せざるを得ず、あえてロビーやロビー上部の屋根を外部空間で繋ぐような意匠とし、道路側と崖側の繋がりを演出しました。

Q:その効果が出ていると思います。オペレーション上の工夫はいかがですか。

高崎:裏動線は単純化し短くしてあり。少人数でのオペレーションが可能です。

Q:会員制では重要なポイントですね。めぐり巡って会員のプラスにつながります。

高崎:通常のホテルに比べると、2割程度の要員を抑えています。

Q:ここの露天風呂は文字通り露天ですね。

高崎:川と露天風呂との一体感から、1階に浴場を持ってきました。露天風呂やロビーと崖のあいだにある川は、これでも篤川の支流ですが、すぐ上流のところに鱒の養殖場があります。したがって、流量は安定して、いつも岸辺に溢れるように「水」が流れています。

Q:1級水系の準用河川でしょうか。晴天が続くと水がなくなってネコでも跨げる河川になる場合が多いのですが、常時、水が流れているのは貴重です。

高崎:1階にはプール、ジャグジー、ゲーム施設。2階に厨房とレストラン、3階に個室会食場や宴会場を設けました。

Q:吹き抜けがありますね。

高崎:2階3階を吹き抜けで繋ぎ、食事会場の一体感を出しました。3階宴会場から篤亭へは渡り廊下進む感覚です。差別化された空間を意図しました。

Q:客室はいかがですか。

高崎:基本は和です。ただ、座ることが苦手な方も多いので、全館掘り炬燵を採用しています。ベッドを好む高齢者が多いので、ツインルームと和室を交互に配置し、コネクティング・ルームとして二つ併せて使える部屋も多くしています。

Q: 中廊下の生け花が印象的です。

高崎: 客室は箒川本流側と崖の林側とに面した中廊下形式です。効率は良いのですが、閉鎖的な雰囲気もあり、趣を添えるための配慮です。

Q: 1990 年といえば、後から考えるとバブル経済崩壊の初期です。いまの欧州通貨危機の発端とよく似た時期です。この施設は良く考えて作ってあります。

高崎: 敷地に比べ建物の規模が大きすぎましたね。土地に目一杯建物を建てるのが効率的という、かの時代の誤った考えの下に設計しましたから。反省しています。

Q: 借景が十分カバーしていると思います。

設計者紹介

高崎能紀(たかさきよしのり) 1945(昭和 20 年)2 月生。紀州鉄道(株)代表取締役、社団法人日本リゾートクラブ協会副会長。一級建築士。紀州鉄道グループの軽井沢列車村ホテル、パルコール孺恋スキーリゾートなどグループの主要施設の設計及び建設に携わる。那須塩原ホテルでは、土地選定、事業計画、基本プラン、実施設計、工事着工完成まで、総責任者として采配を振った。

記録とインタビュー 文責 大谷